

# 写真展と語り合い サハリン残留朝鮮人の軌跡

片山通夫 フォトジャーナリスト

## はじめに

今年は戦後60年ということで、マスコミもいろいろな企画を立てて報道してきた。6月23日の沖縄戦終結の日、8月6日広島原爆記念日、そして長崎、それに続く15日の終戦記念日。

戦争を経験した人達は戦争のおろかさを語り、戦争を知らない若者達は歴史に学ぼうと、様々な催しも各地で開かれた。そして様々な人達が様々な場所で平和を祈念した。そういえば、核保有国で唯一はじめて、フランスのパリ市役所ホールで9月5日から原爆展が開催されたことも耳新しい。「戦後60年」という年は我々日本人に戦争の愚かしさを改めて確認させてくれる1年でもあった。

今年（2005年）6月20日・21日の両日、小泉首相は訪韓した。その時の韓国ノ・ムヒョン大統領との会談で、日本側は過去に起因する問題に次のように言及した。

小泉総理より、

(イ)朝鮮半島出身者の遺骨の調査・返還、(ロ)在サハリン韓国人や(ハ)在韓被爆者に対する支援等の過去に起因する問題への対応を人道的観点から可能な限り進める

との方針を説明した。(外務省のホームページから)

ここでいう「在サハリン韓国人や……」はまさに筆者が、6年前から取り組んできたサハリン残留朝鮮人の問題である。

\* 外務省の文書では「在サハリン韓国人」と表記されているが、本書では従来どおり「サハリン残留朝鮮人」と表記する。これは戦前からの表記「朝鮮人」のほうが、彼らの実情を表すのに的確だと考えるからである。

## 歴史概略

戦後60年にもなる今年になって、小泉首相が韓国大統領に何故サハリン問題を取り上げなければならなかったか、そもそも何故サハリンに朝鮮人がいるのか、それを理解していただくためには、まずその歴史的背景を説明しなければならない。

### 樺太開発

いささか古い話に戻る。ロシアとの間に交わされた条約の一つに下田条約(1855年)がある。この条約では、ロシアとの国境に関して、択捉(以南は日本側)ウルップ(以北はロシア側)の間に国境線を制定し、樺太(サハリン)に関してはこれまでと同様、両国の間に分割しないで混住すると規定されている。つまりサハリンをロシア領でもなく日本領でもない両国の混在地域とした。

当時のサハリンは政治犯や刑事犯などの流刑地だった。ロシアの文豪、チェーホフの「サハリン島」は、彼が30才の時、すなわち1890年にサハリンへ赴いて書いた記録で、当時の様子がよく描かれたルポルタージュである。

その後、日露戦争の結果、ポーツマス条約(1905年)が締結されて、樺太は北緯50度線をもって国境として、以北をロシア、以南を日本が領有することになった。この頃、樺太には先住民が住んでいたことも言及しておかなければならない。ニヴフ、エヴェンク、アイヌ、そしてオロツコの諸民族である。樺太には膨大な石炭をはじめとする地下資源や森林が存在する。日本はこの資源を求めて南樺太(北緯50度以南)への入植(移民)策を推し進めた。『樺太沿革・行政史』(社団法人 全国樺太連盟編・昭和53年6月15日発行)によると、豊原(現コジノサハリンスク)に樺太庁が置かれたのは1907年3月のことであり、それまでの軍政が解かれた。1906年の人口はわずか12,361人だったのに対して、1941年末には406,557人と急激な人口増をみた。これは日本政府の積極的な植民政策が、資源開発、開拓政策とともに押しすすめられた結果であろう。また軍政が解かれたとは言え、樺太は日本にとって対米、対露(対ソ)軍事作戦上、重要な位置を占めていたので、千島とともに、陸海軍の基地が設けられた。

1945年当時の樺太における日本の軍力は第88師団(豊原)を中心に約3万の兵力があったと言われている。同師団への命令は対米が中心となっていたようである。樺太の日本軍が対ソ戦略にその軸足を移した時期は、はつき

りしないが、ドイツが降伏した頃のことであろう。ソ連が欧州での戦争を終えて、シベリアへその戦力を移動してからと考えるのが妥当であろう。とは言えそれ以前にも、日本はソ連を潜在的な敵とみなしていたので、千島あたりでは対米戦略とともに、ソ連に対する警戒も怠らなかった。千島列島の一部の海峡では、ソ連商船の航行阻止なども行われたようである。

#### 強制連行への道

日本が1931年に満州事変を引き起こして、翌1932年に満州国を樹立した頃、朝鮮半島は、大陸へ侵略するための準備を企てていた日本軍の後方基地化、兵站基地化してきた。当然農民を始めとする朝鮮半島の人々の生活は困窮を極めていたと言える。朝鮮総督府の公式統計では1932年時点で87万人の朝鮮人が海外に住んでいて、そのうち65万人が満州（現中国東北部）、20万人がシベリア・沿海州に住んでいたとある。

#### 不足する労働力

戦争が始まってしばらく後、日本の戦局が思わしくなくなり、消耗戦に入って人的被害が膨大になりつつある中で、不足する労働力を補うために、朝鮮半島からも労働力の補充をしなければならなくなってきた。

1937年に始まった日中戦争、それに続く太平洋戦争で、日本は次第に泥沼化してゆく戦況を維持するために、そして極度に不足してきた労働力を確保するために、朝鮮半島の主に南部（現韓国・農村地帯）から朝鮮人を充てることとした。1931年9月、「朝鮮人労働者募集要綱と朝鮮人労働者移住に関する事務取扱手続」を制定。

その後、日中戦争と1941年に始まる太平洋戦争の激化に伴って、「朝鮮人狩り」が半ば日常的に行われるようになった。「応募」、それに続いて「募集」、そしてすでに日本国内では施行されていた「国民総動員令」を朝鮮半島にも適用し「徴用」となり、強制的に連行される人々を含めて、朝鮮人の数はサハリンで6万人（推定、北海道新聞社調べ）を数えるようになった。

募集などで来ていた朝鮮人にも「国民総動員令」が適用されて、2年の期間という就業の契約は無視された。つまりあらためて現地徴用となったのである。

現在サハリンに残された朝鮮人一世たちはほとんどがこの「応募」、「募集」、「徴用」のいずれかの方法でサハリンに赴いた。

## 強制連行

韓国・大邱市で、サハリンへ行ったまま帰国できない夫たちの「帰国を待ちつづけている妻」たちに会い、話を聞いた。彼女たちの夫はほとんどが、日本の官憲もしくは官憲の権力をうしるだてにした企業の日本人によって、強制的にサハリンへ連れて行かれていた。ここで注意しなければならないのは、その名目が「応募」であれ「募集」であれ、「植民地朝鮮の人間には、断るという選択肢はなかった」ということである。万一断れば、その日から食料の配給を絶たれたり、息子が隠れていたりすると、年老いた両親が連行され拷問を受けたという。儒教の教えが社会規範の当時の朝鮮では、絶えがたい苦難であったろうと思われる。このような状況下では、出頭しないと、今まで通り村では生きていけないことは自明の理であった。

植民地の朝鮮半島の人々にとって「応募」や「募集」、「徴用」の相違はなかったといっても過言ではない。従わなくては生きてゆけないシステムが緻密に計算されて構築されていた。

戦時中の日本で「欲しがりません。勝つまでは」の標語や「贅沢は敵だ」の標語にそむき、パーマをかけた女性が、日本の社会で普通に生きていけたらどうか。「御真影」に向かって一礼しないで、生きていけたらどうか。日本人でもそうだった時代である。ましてや「半島人」と蔑視されていた人々にとって、他に生きる道があったとは思えない。

このような時代背景の社会で、無理やり夫を連れ去られた妻たちの生活がどのようなものだったか、想像を絶するものがある。

## ある証言 韓国・大邱市に住む李外植（77才）さんの場合



李外植（77才）さん

私の人生で、楽しい思い出なんか無い。ただ、貧しくて苦勞したことだけが頭に残っている。

当時、私たちの地方では、結婚後、1年間、長くて3年間、新郎が新婦の家に通う風習があった。新婦の家で結婚式を挙げてから1週間あるいは10日、裕福な家だと1カ月くらい泊まってから、婿さん1人で実家に戻る。私の場合、結婚式を挙げてから1週間一緒にいた。一緒と言っても夜寝る時だ

けだけどね。顔もはっきり覚えていない。婿さんは、男の親戚たちと毎日宴会だ。昼も恥ずかしくて目を合わせないんだから、夜はすぐ明かりを消して寝るんだ。それから夜明けに急いで部屋を出た。恥ずかしくて顔をあわせられなかった。そのうちに帰る日が近くなってね。あと3、4回来たかしら。頻繁に来ることもできなかった。「娘の旦那は百年の客」と言って、大事なお客さま。だから、色々のご馳走を用意しようとする。物が十分あるわけがない。だから遠慮して。3、4回は訪ねて来たが、長くはいなかった、いつも日帰りだった。

そうして離れている時に連れて行かれたから、ちゃんとした別れもしていない。主人がいなくとも風習通り1年たってから夫の家に嫁入りした。

それからお姑さんと一緒に夫の帰りを待つ生活が始まった。2人で40年間待ちつづけた。16年前、結局息子の顔を再び見ることなく悔いを残してお姑さんは亡くなった。運命でしょうかね。今は1人となって夫を待ちつづけている。

考えてみると、1日も心安らぐ日はなく、胸の底にずっとシコリがあるわけ。姑も一緒。死んでも死にきれないと悔やんでいたから……。それはそうだろう。私のお父さんもそうだった。若くして独りになって苦労ばかりしている娘のことが一生心配で、息を引き取る瞬間まで夫の消息を気にしていた。親も兄弟も、顔を合わせる度に深いため息をつきながら私のことを心配するから、実家にはめったに顔を出さないでいた。顔をみないと忘れる時もあるだろうと思って……。今でも兄弟は、会うたびに、なんて悲しい運命なんだと暗い顔する。

食べ物は自分の畑で取れたものだけ。ご飯に一品のおかず。お肉が食べたい？ そんな贅沢なこと思ったこともない。食べたことないから肉の美味しさもよくわからない。私は昔から家に人を呼ばない。自分の生活を見せたくないから。急にお客さんが来ると困って大変だ。お客さんに出せるものが無くて。

ロシアとの門戸が開かれてから、夫に再会した人や、遺骨を持って帰ってきた人も多い。でも私の場合夫の行方がまったくわからない。永住帰国した人たちを訪ね、夫のことを聞いて歩いたり、新聞に広告も出したりしたが、今まで夫を知っていると名乗り出てくれた人は1人もいない。1度はサハリンまで探しに行った。でも、だめだった。死ぬ前に1度でもいいから会って、私がどんな思いで、どうして生きてきたか、それだけでもわかってもらってから死にたいと思った。こうして、誰にも分かってもらえず1人で死んでいくのはあまりにも悔しい。空しくて、悲しくて……。死んだとはっきり分かれば諦めもつくだろう。しかし、それさえもわからない。

サハリンの海を眺めながら、死のうかとも思った。死んだらこの苦しみから解放されるかなと思って。若い時農薬を飲んで自殺を図ったことがあった。運がよかったのか、悪かったのか、命は助かった。1度死のうと思った人間だから死ぬことに恐れは無い。しかし、兄弟の顔を思い浮かべてはそれもできなかった。私がここで死ぬと、兄弟に迷惑をかける。今までも心配ばかりかけて来たのに、ここまで兄弟を来させるなどの面倒をかけてはいけなかった。

## 第2の悲劇

一方、サハリンに残された朝鮮人たちの気持ちはどうだったのだろうか。1945年夏、日本の敗戦当時、サハリンには日本人が40万人、朝鮮人が4万人あまり居たと記録にある。サハリンでの朝鮮人たちの生活は、概して悲惨なものだった。飛行場建設、鉄道敷設など土木従事者はまだしも、ほとんどが炭鉱労働に狩り出され、サハリンの炭鉱労働者の35%を占めた。

戦後、朝鮮人たちは帰国できなかった。日本政府は「皇国臣民として」サハリンへ向かわせた彼らを切り捨て、戦後日本人（民族的に）だけを対象に帰還させるようソ連当局と交渉した。戦争終結前に10万人が帰国し、一部の日本人を除いてほとんどの日本人（およそ30万人）が、1946年12月から始まった引き揚げで1949年7月までに日本に帰国した。

### 外国籍の朝鮮人

昭和53年（1978年）4月、厚生省援護局編集、株式会社ぎょうせい発行の『引き揚げと援護30年の歩み』には、次のように記載されている。

「樺太からの帰還者は、日本人引揚者766人に対し、外国籍の者は1541人で外国籍の者が圧倒的に多くなっている。これら外国籍の者は日本婦人に同伴する朝鮮人の夫とその子どもであって、日本人引揚者は……」

この中の「外国籍の朝鮮人」とは、ほかならぬ「皇国臣民」として朝鮮半島から樺太に渡った人々であった。帰国できたのは、「日本人と結婚した外国籍の者」だけであった。ここに記載されている樺太からの引き揚げは、1957年から1959年の3年間に帰還した人たちである。

このように厚生省援護局の資料では、朝鮮半島からサハリンに渡った「皇国臣民」が「外国籍の者」と記載されているのである。

このことが、サハリンに朝鮮人を棄民する発端であった。ここには朝鮮人に対する引き揚げの手立てやソ連当局に対する働きかけなどは微塵もない。当時はGHQに外交権を抑えられていたので、日本が独自にソ連当局や国際機関などに働きかけることができなかったという立場もあった。

しかし資料（『引き揚げと援護30年の歩み』）には、「政府は日ソ国交回復を機として、未帰還者調査を促進するため、昭和32年4月、在モスクワの日本大使館に調査担当官を派遣したところ……」とあって、樺太地域の残留者から帰国嘆願書が寄せられたことが述べられているが、そこには在サハリン朝鮮人からの嘆願書などに関する記載がない。その後ソ連当局と精力的な引

き揚げ交渉や調査などが行われるのであるが、日本の当局者の帰還交渉計画には朝鮮人の帰還問題はまったくなかった。

### 冷戦の落とし子

こうしてサハリンに残された朝鮮人たちは、ソ連統治下のサハリンで、国際政治の荒波をまともに受けた。そして、物言えぬ生活、無国籍の悲哀をなめながら、祖国への帰還を夢見て半世紀以上の長きに渡る生活を余儀なくされた。

無国籍に関しては説明を必要とする。朝鮮戦争の結果、朝鮮半島が北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と大韓民国に分断された後、ソ連統治下のサハリンでは、大韓民国という国は存在していなかったのだ。

ソ連は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を朝鮮半島での唯一の国家と認めていたものであり、南半分はアメリカの傀儡政権の地域として「南朝鮮」と表現していた。

サハリンに取り残された人々に、ソ連当局はソ連籍を、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の領事館員は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）籍をとることを執拗に勧めた。しかし「何時の日か祖国に帰れる。そのときにソ連籍や北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）籍だと帰れないかも知れない」として、無国籍で過ごした人が多かった。

朝鮮半島、サハリンを取り巻いていた環境は以上に述べたように相当複雑なものであった。「20世紀は戦争の世紀」という表現がある。朝鮮半島とサハリンに住む朝鮮人たちの運命はまさにその戦争（冷戦を含む）の被害者と言える。



済州島出身のおばあさん。彼女は祖国の島へ帰りたいが、現在は島の受け入れ不可能。ウグレゴルスクで。

私は今回の取材を進めてゆく過程で、住んでいる国や地域、またその時代などによって1人の人生が大きく変わっていく様をまざまざと思い知らされた。この国家による暴力的な個人生活の破壊は、今なお世界中で起きていることに注意した

い。

## 永住帰国

ペレストロイカという言葉がある。旧ソ連邦は無論、旧東欧圏の国々も、ソ連邦の崩壊とともに劇的な変化を遂げた。サハリンでも同じ変化があった。残留朝鮮人たちは「やっと帰国の道が開けた」として、日本や韓国赤十字社に、祖国帰還運動を展開した。政治家や市民運動家など、様々な立場の人達が彼らを支援した。そして2000年2月初め、実に55年ぶりに、彼らのうちの1000人がソウル近郊の安山市に永住帰国した。

しかしこの永住帰国にも多くの問題が含まれている。その1つは1945年以前に生まれた人だけが帰国できるという条件である。これは必然的に「新たな家族離散」を招くことになる。

サハリン韓人会会長のバク・ヘリョン氏はいう。

「一世がどんどん亡くなっている今、日本政府が二世、三世のことを考えてくれないと、韓国政府は動いてくれません。一世に対しても積極的じゃないのに、二世、三世のことなんか他人ごとですよ。

夫婦が揃っていないと帰国できないと言うから、無理やりにペアを組んで帰るということも起こっています。だから今トラブルが多いのです。考えてみてください。親兄弟が一緒に生活していても合わないことも多くてぶつかったりするのに、赤の他人同士が帰国のためだけに組んだら問題が生じるのは当たり前でしょう。獣もこんな組み方はしません。獣さえも付き合って好きになった相手を選ぶのですよ。お爺さんは7・80才、再婚相手は40代。夫婦の場合はどちらかが1945年以前生まれなら良いんです。そして、他人同士が組む場合は両方とも45年以前の生まれじゃないといけません。同じ民族の韓国人がわれわれのことを思ってくれないと、われわれは人間らしい永住帰国をすることは不可能です。今の永住帰国のシステムは新たな離散家族を作り出しています。戦前にも離散家族を生んで、今また、離散家族を生んでいるようなものです」

## そして今

韓国・安山市に帰国した人達の中で130人あまりが亡くなった。原因は様々だが安山市から派遣され、帰国者たちのケアを行っている看護師の1人はこう話す。

「もちろん、皆さんお年を召しておられるので、様々な病気も持っておられ



思うのはサハリンに残してきた子供や孫のこと。韓国・安山市の永住帰国者アパートで。

ます。でも、一番の原因は心の病気だと思います。サハリンに残してきた子供や孫に会えないと言う……。寂しいのです。私たちも色々気分転換のためのプログラムを用意しているのですが……。」

冒頭に掲げた小泉首相訪韓時に上げられた「在

サハリン韓国人や在韓被爆者に対する支援等の過去に起因する問題への対応を人道的観点から可能な限り進めるとの方針」に呼応して、韓国国会議員（与党ウリ党）がサハリン同胞支援のための特別法の制定に動き出した。

同法案では、「サハリン同胞」を「満州事変以後、第2次世界大戦までの時期にサハリンへ強制連行された者とその配偶者及び直系卑属」と定義し、国家の永住帰国及び定着・生活支援の対象を現在の同胞一世からその子孫まで拡大する内容を含めている。法案の主要内容は以下のようである。

- 一、国家はサハリン同胞の帰国・定着生活支援に必要な対策を講じ、永住帰国したサハリン同胞及びサハリンに居住しているサハリン同胞の中で希望するものの（韓国）国籍回復のために努めるべきである。
- 二、国家はサハリン同胞に対する被害補償と日帝時代の個人郵便貯金と年金貯金などの問題を解決するための日本との交渉を講じ、サハリン同胞たちの居住国国籍取得のためにその国との交渉につとめるべきである。
- 三、より体系的な支援のためにサハリン同胞支援などに関する事項を審議・議決するために外交通商部にサハリン同胞支援委員会を設置する。
- 四、具体的な支援のためにサハリン同胞の中でこの法律により支援を受けようとするものは、外交通商部に支援を申請し、外交通商部長官はサハリン同胞支援委員会の審議を経て、支援可否を決めるようにする。

この法案が韓国国会でどのような結果を生むのか、現時点ではわからない。しかし少なくとも、韓国政府にサハリン残留朝鮮人の問題に関する具体的な対応を突きつけたことは間違いない。

2000年2月、サハリンの朝鮮人たちが長い間待ちわびた永住帰国がようやく実現したが、これは又新たな離散家族を生むことになった……



コルサコフ（旧大泊）の朝鮮人集落  
人々は「祖国に帰れる」と終戦直後に港町大泊に集まった。



永住帰国の日、空港を埋め尽くした人々



永住帰国の日、孫との別れで



今も帰国を夢見ている人々。炭坑の町ブイコフで。

（かたやま みちお）